

山の花の図鑑雑感

皆 上 勝 哉

スポーツには沢山の種目があります。オリンピックをみてもこれまで聞いたこともみたこともない種目が沢山あります。

多種多様なスポーツが存在することは素晴らしいことです。私の若い頃のスポーツは、少年時代は野球、青年時代は登山というのが一般的な風潮でした。終戦後の日本は貧しく、お金のかかることは何もできない時代であり、野球は空き地や原っぱがあり、2～3人集まればできるし、登山は持続力さえあれば誰でもができ、高校や大学のワンダーフォーゲルや山岳部は沢山の部員を擁していました。豊かになった現代、スポーツもレジャーも多様化して、歴史のある高校、大学のワンダーフォーゲルや山岳部でも部員が1～2人とかで、廃部寸前という話をよくききます。山に登ってみるとたしかに若者の姿は少なく、中高年ばかりが目立つのも昨今の現状です。人に聞くと「レジャーが多様化していることも事実であるが、それよりも若者たちが、現代の世相を反映して、長、重、鋼よりも短、軽、薄を好み、重い荷物を持ち、汗水垂らして山の頂を極めるよりも、カラフルなスキーウェアに身を纏いリフトに乗り颯爽と山を下る方が楽だからだ」と言います。確かに汗水垂らして、山に登っていると、特に風雨の強い時など、なんで山登り？ などと思うこともしばしばです。しかし、稜線上では、ガスの一瞬のきれ間から眼下に重畳として連なる山並み、林間では木の葉や花に零れる雨滴、樹幹や岩に付着した苔の美しさなどは、雨の日でしかみることのできない光景です。

登山の楽しみは幾つもあります。山があるから登る：ひたすら山の頂を目指して登る。高山植物：高嶺の花があるから登る。人里にいない鳥が棲み鳴くから等々各人各様に目的は違いますが、自分の趣味やストレス解消等日頃と異なる自然環境を求めての登山であろうと思います。

私の登山も若い時はひたすらただ登るだけでしたが、運動中の骨折による事故のため入院生活を余儀なくされ、その見舞いに差し入れられた本で、バードウォッチング、フラワーウォッチングの楽しみを知りました。この時病院図書館の必要性や図書館におけるアウトリーチサービスの充実を痛感しました。退院後バードウォッチングやフラワーウォッチングに関する本を図書館や書店で漁りました。関連資料は沢山ありますが、トレッキングの際に携帯する一冊の図鑑の選択に難渋しました。

花は人里から野、山、高山、深山幽谷まで至る所各自の適する季節・環境の中で自生しています。オールマイティな図鑑はありますが重くて不便です。図鑑には里の花（道ばた、湿った所、水辺、雑木林の花）、山の花、高山の花（崩壊地、風衝地、雪田、池塘・湿原：尾瀬の花たち）、春の花、夏の花、秋の花：葉が落ちて実（赤、白、紫）となった時期の花？、地域の花（九州の花、北海道の花等々）、山塊毎の花（九重の花、富士の花、白山の花、大雪山の花等々）とあり、歩く場所、季節で使い分けねばなりません。しかし、日本列島は北から南まで広く場所も季節も明確な区分はなく曖昧で、日本最北端の礼文島の海岸線には日本アルプスの高山植物が咲き、日本で一番遅い

桜の花は大雪山で6月の下旬から7月の上旬に見ることができます。花を同定する要素として白い花、赤い花等色がありますが、花の色は咲く時期、場所によって若干異なり、同じ花も撮影条件によって図鑑毎に色彩が異なります。花の背丈（木か草か背丈だけでは判別し難い）も生育環境によって異なり、エゾツツジは厳しい環境ではスマレの花と同じ程度の背丈しかなく、しかも背丈くらい大きい花びらを開きます。花をミクロで見るか、マクロで見るかによっても随分異なる。登山道で先ほど目にした花と目の前の花との同定が困難であったり、図鑑の花との同定が困難なことが屢々あります。最近出版社も工夫を凝らし花の色、実、背丈で検索できる図鑑を刊行するようになりました。しかし現状ではまだ列挙式分類法で、合成分析型分類法にはいたっていません。季節はいつか？ 生育環境は？ 色は何色？ 花の形は？ 葉の形は？ 葉の先端は？ 葉の付き方は？ 葉の切れ込み、葉序？ 樹幹の色、形、全体の高さは？ 等々と同定識別するのに植物の専門家なら容易かもしれぬが、素人には家で図鑑を調べても、同じようなものが非常に多く、諸般の状況から多分これだろうと妥協する以外になく、誤って別名で認識することが多々あります。このようなとき個々の花の全体と共に葉、花、果実、葉柄などのディテールをはっきり観ることのできる図鑑があれば、前述の間違いをすることも少なくなることでしょう。最近山と溪谷社からシリーズものとして『野に咲く花』『山に咲く花』が刊行され、ずいぶん同定・識別が容易になりました。春の山野によく見られ、春に咲くリンドウとしてはこの二種類しかないのですが、「ハルリンドウ」と「フデリンドウ」の区別が難しく、図鑑での説明では理解したつもりでも現地で見ると混乱してしまうのが常であった。山と溪谷社『日本の野草』の説明によればハルリンドウは「東アジアの温帯の日当たりのよい、やや湿った山野に広く分布する2年草。全体が淡緑色を帯び、高さ10センチくらいになる。根生葉はロゼット状につき卵形。茎葉は卵状披針形。花茎は数本が集まって立ち、先端には青紫色の花を一個上向きにつける。花冠は長さ2～3センチで漏斗状をしており、下部は筒となる。裂片は三角状披針形。萼筒は8～15ミリ、萼裂片は披針形で直立しそり返らない。花期：3～5月、生育地：山野、分布：本州、四国、九州」とある。一方フデリンドウは「日当たりのよい山地や野原に生える5～10センチの2年草。東アジアの温帯に広く分布する。根生葉は小さく、ロゼット状にはならない。葉は広卵形で全縁、質はやや厚い。裏面にはしばしば赤紫色を帯びる。茎の先には青紫色の花を数個つける。花冠は長さ2～2.5センチあり、先は5裂する。裂片と裂片の間には副片がある。蒴果には柄があり、やや花冠から突き出る。和名は花の様子が筆の穂先に似ていることによる。花：4～5月、生育地：山野、分布：北海道、本州、四国、九州」と記され、どちらの花にも図鑑的な写真が一枚添付されている。この図鑑は720p、20×20cm 1720グラムとかなり重く携帯には適していない。家でよく読んで、コピーをもって現地で現物と比較しても同定・識別が判然としにくい。『山に咲く花』では、両者の説明文は省略するが、両者の花冠、根生葉、基部の葉、全体の写真8枚の写真を貼付しており、ルーペで比較すると両者の同定・識別に苦しむことは少なくなった。しかし比較に使用した2冊の図鑑における花の配列はNDCの配列と異なり、双子葉合弁花類、双子葉離弁花類、単子葉類の順に配列され、花期は関東近辺を標準にしている。生育地、花期、花の色などによる検索キーは用意されていない。学名索引、和名索引の導からの本文中の説明による以外にない。花の学名、和名が分からなければ、最初の1頁から最後の頁までをめぐらなければならず、現地での当座の役には立たないことがある。シリーズ名が「ハンディ図鑑」

と命名されているが、615グラムとかなりな重量がある。行く場所によっては2冊を持って行く必要があり、1グラムでも荷物を軽くしたい山行では選択に悩まされる。いつも行く山であれば、咲く花も見当がつくが、滅多に行かない山であれば、他のものは犠牲にしても図鑑だけは数冊を持って行かないと、後々後悔するところになり、重いのに難渋しながら登ることになる。

登山の世界にも『深田久弥の日本百名山』等の電子ブックが出回り、バーチャル登山、3D山岳風景から情報を取り出したり、歩いた軌跡をシミュレーションすることもでき、登山の楽しみも倍加しました。「花」に関して田中澄江の『花の百名山』をCD-ROM化した『花の百名山』があります。花の名前、色、咲く時期から検索でき、更に検索項目を複合的に検索することも可能であり、ズームイン、ズームアウトすることで花、葉、茎の細部の観察も可能となり、紙に印刷された図鑑にはない複合的な利用方法があります。

登山に際してインターネットにより、各地の山小屋から発信される最新情報（今咲いている花、鳴いている鳥、積雪、雪解けの状態、気象情報等）を入手し、山行を決めているのが現状であるが、これから先ノートパソコンがもっと軽量化され、（現在の秒進分歩の進歩では間近だと思うが）、複合検索が可能なアプリケーションソフトが作成されると、これまでの登山地図、ガイドブック、図鑑、カメラ、ビデオでなくパソコンがザックの中に収まることは必定である。登山道の脇で咲いている花を時期、山城、標高・環境（林床、崩壊地、風衝地、雪田、池塘・湿原、稜線）をパソコンに入力し、インストールしている電子ブックと照合して、花の名前を同定・識別し、クローズアップで写し、樹上で啼いている鳥の名前も同様同定・識別し、姿・歌声を録画し、山頂で遮るものもない360度の大パノラマを山に登れなかった家族や知人にオンラインで送れるのも間近でしょう。

電子ブック、インターネットなどのデジタル情報と紙への印刷メディアのアナログ情報とは一長一短があり、まだ紙資料に依存しているのが現状です。次なる山行計画をたてながら、花の写真集を眺め、夢見る時が至福の時であり繰り返し繰り返し飽きずに何回も見ることのできるのはいはり紙に印刷されたメディアです。

山に持って行く花の図鑑によいものはありませんかと尋ねられてこれですという図鑑には出会っていませんし、図書館員としてお勧めできるものもなく、TPOで使い分ける以外にないと説明するしかいまのところないようです。

(あざかみ かつや 別府大学)

引用文献

- | | | |
|---------|-------|------|
| 『日本の野草』 | 山と溪谷社 | 1983 |
| 『山に咲く花』 | " | 1996 |
| 『花の百名山』 | " | 1998 |



レブンアツモリソウ 花期6月 北海道礼文島（花の浮島との別名もある）の固有種、やや湿った草地に生える。全体が小形で花は淡黄色。側花弁は広卵円形で先がとがり、袋状の唇弁を抱きかかえるような姿が目立つ。



エゾツツジ
花期7～8月、北海道の高山の岩礫地に生える。

草のように見えるが、れっきとした樹

木。高さ5～20センチ程度の落葉小低木、葉は長さ3センチの倒卵形、縁に長い毛がみえる。経3センチほどの赤紫の花が枝先に1～3個つける。



キタダケソウ 花期6～7月 北岳の固有種 南アルプスの高山の礫まじりの草地に生える多年草。高さ10～20センチ。葉は3出複葉で、小葉は細か切れ込む。花は白色で直径2～3センチ。咲く時期が梅雨の最盛期なので、見るのがなかなか大変である。

『花の百名山』 山と溪谷社より